夢を追いかけて

平成24年のプロ野球日本シリーズで、補聴器を付けてマウンドに上がっていた北海道日本ハムファイターズのリリーフ投手、石井裕也選手をご存知でしょうか。石井選手は、先天性難聴で左耳は全く聴こえず、右耳の聴力は補聴器を付けて少し聴こえる程度しかありません。しかし、そうした障害を物ともせず、子どもの頃からの夢だったプロ野球選手になり、今年で9シーズン目を迎えます。

▶幼少期を振り返り、思わず笑みが

―昨年のパ・リーグ優勝おめでとうございます。日本シリーズでも登板されていましたね。

ありがとうございます。日本一は逃しましたが、リーグでの優勝嬉しかったです。

―野球をやり始めたのはいつですか。

小学校2年生の時です。グローブをはめたのは幼稚園の時、父親から買ってもらいました。兄が少年野球チームに入っていたので、一緒にやり始めたのがきっかけだったと思います。

野球はコミュニケーションをとることがとても大切です。チームでは、みんなが身振り手振りを交えて大きな声で話してくれたので、自分も一生懸命に仲間とコミュニケーションをとるようにしました。

―補聴器はいつから付けていらっしゃるんですか。

小さい時から付けていますが、言葉の判別はできない事が多くて困りました。会話をする時は、相手に大きな声でゆっくり話してもらうようにしています。聴こえない時は相手の口形から言葉を読み取るようにしています。

小学校の頃は、学校の授業を半分くらい受けて、後は「言語訓練教室」で言葉の勉強をしていました。言語訓練教室では、言葉を聴き分ける、先生の口元の動きを見て発音の練習をする、聴力検査を受けるなどの事をしていました。この教室は、他の地域の小学校にありましたから、2つの小学校に通っていたので大変でした。

―プロを目指したのはいつ頃ですか。

5、6年生の時に、横浜ベイスターズの野球教室で、ハマの番長と言われた三浦大輔投手にピッチングコーチをしてもらいました。「けっこういい球放ってるな」と誉められました。そのころから球が速かったので、プロに行けるかな、と意識し始めました。

―プロ野球選手になろうとした時、ご両親は心配されたのではないでしょうか。ご自身には迷いはありませんでしたか。

両親は、何でもやりたいことをやらせてくれました。それよりも、すごく厳しい世界だと自分で分かっていましたから、ここからが勝負だと思って、腹をくくって挑戦しようと思いました。必ず夢を叶えたいと思いました。

―プロに入る前は三菱重工の社会人野球部に所属していましたね。

野球のない日は事務の仕事がありました。1週間も野球ができない時もあり、そんな時はパソコンの前に座り事務の仕事です。ボールを投げられない日々にストレスを感じました。野球をしない生活がどれだけ辛い事か思い知りました。

三菱重工には5年いましたが、肩のけがをしてしまって手術を受ける事になりました。2年間もマウンドに上がることができませんでした。その間、ひどく弱気になりました。ここまで頑張ってきたけど、プロになるのはもう諦めようかと。でも、野球ができない方がもっと辛い事を知っていましたから、折れかけた気持ちを奮い起こしてリハビリに通いました。そして、「絶対に夢を実現させる」という強い気持ちに変わっていきました。

―その後、見事にプロ入りを果たしましたね。

すごく嬉しかったです。結果を残さないと厳しい世界だと自分は分かっています。厳しい練習で辛い日々もありました。覚悟をした世界です。弱音を吐かずにメニューをこなしました。精神力が鍛えられたと思います。

プロに入ってからの8年間は、辛い事ばかりではありません。チームメイトや監督、コーチ陣と良い関係ができ、尊敬する選手との出会いもありました。中日ドラゴンズの岩瀬仁紀投手や山本昌広投手にはかわいがってもらいましたし、学ぶ事も多くとても良い刺激を受けました。両選手のことは尊敬しています。目標としています。

現チームメイトの鶴岡慎也捕手とは三菱重工時代にもバッテリーを組んでいましたから、気心の知れた間柄です。鶴岡捕手は「攻めろ、もっと攻めろ！」とジェスチャーで合図を送ってくれますし、「リードは任せろ！」と強気でいてくれるので、安心して投げられます。

栗山監督には「後輩を引っ張っていく存在になってくれ」と言われました。

―ところで、マウンドでは補聴器のスイッチを切っているそうですね。

マウンドに入って、補聴器のス

◀マウンドでは補聴器のスイッチを切っている。「サイレントK」と呼ばれるゆえんだ

©H.N.F

石井 裕也(いしい・ゆうや)

1981年生まれ。神奈川県横浜市出身。
横浜商工高等学校、三菱重工横浜を経て、2004年ドラフトで、中日ドラゴンズから指名を受け入団。
在籍球団：中日ドラゴンズ（2005年～）横浜ベイスターズ（2008年～）北海道日本ハムファイターズ（2010年～現在）。左投左打。

イッチを切り、バッターに向かって集中力を高めています。スイッチを切ると、全く聞こえません。集中力を高めることができます。

高校2年生の夏の大会の時に、応援団の太鼓やブラスバンドの音がうるさくて集中できないので補聴器のスイッチを切ってみました。とても静かで、これは集中できる、武器になる、と思いました。それが補聴器のスイッチを切るようになったきっかけです。

―昨シーズンは、一時体調を崩されたそうですが…。

昨年の春頃は調子が良く、開幕メンバー入りをしていましたが、突然、体調不良を起こしてしまいました。開幕してから2～3日目に急にめまいがしてバランスも効かなくて、大幅に聴力が落ちてしまい、10日間入院し毎日点滴を打ちました。原因ははっきりしませんでした。疲れていた訳ではないのですが、めまいのせいか体が動かなくなり、調子がなかなか戻らず何も聴こえなくなってしまいました。野球生命に関わるかなぁと、とても不安になりました。

球団の方やチームメイトも監督もコーチ陣も、みんな心配してくれました。ありがたいと思いました。すごく感謝しています。監督には、「僕もめまいをおこしたので気持ちは分かるが、最後まであんまり無理しないで自分の気持ちで頑張ってくれ」と励まされましたし、勇気をもらいました。

―早くマウンドで投げたかったのではないですか。

野球をやりたい気持ちがとても強いので、最後まであきらめたくないと思いました。無理してけがをしないように、少しずつ少しずつペースを上げて、二軍で一生懸命練習しました。

なかなか調子があがらずイライラすることもありました。しようがないけど後は自分の気持ちの問題、マウンドに上がってもう一度球を放りたいので、焦らずにゆっくり、油断しないように調整して少しずつ練習して試合に出たいと思っていました。

―そして、ついにマウンドに帰ってきましたね。

はい、シーズン後半にやっとマウンドに帰ってくることができ、すごく嬉しかったのを憶えています。諦めないでよかったと思いました。

久しぶりのマウンドは嬉しかったのですが、もちろん苦しい場面もありました。そんな時は気持ちの切り替えをして、バッターに向かってすべて忘れて思い切り投げれば、球が安定し弱気になりません。打たれても気持ちの切り替えは早くできます。昨日の事は忘れて今日もまた頑張ろうという気持ちが強いので。

ただ、昨年の日本一を決める戦いで、決勝打を打たれた時だけは、さすがに切り替えができませんでした。泣きました。悔しくて泣きました。自分を責めていました。日本一になりたかった。とても悔しかったです。あの時だけは、立ち直るまで数日かかりました。

今は、リベンジしたいという強い気持ちに変わっています。これからも、もっともっとずっと球を放り続けたいです。最後まで諦めずに頑張る強い気持ちで、ずっとずっと野球を続けたいですね。昨年は日本一になれませんでしたが、今年は何としてでも日本一になりたいです。

―最後に、石井選手から夢を追い続ける人たちにエールを送っていただけますか。

夢に向かって、最後まで諦めずに頑張ってください。強い精神力をもって挑戦しつづければ、夢はきっと叶えることができます。

石井裕也選手は、野球を愛する気持ちに忠実に、プロになる夢を追い続け、そして叶えることができました。それは、石井選手の強い気持ちと努力、そして温かい仲間たちの支えがあったからではないでしょうか。